昇天日　　主イエスの昇天の意味　　２０２３．５．１８．

今日は昇天日です。イエス様は復活して４０日目に天に昇られたことが、使徒言行録に書かれているので、復活節第６主日後の木曜日を昇天日として守っています。それで、今日は、イエス様の昇天、ということが、私たちにとって、どんな意味があるのか、考えてみることにしましょう。

イエス様が天に上げられることを詳しく書いているのは、使徒言行録１章９節です。
『1:9 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。』

イエス様は、弟子たちが見ているうちに、天に昇られるのですが、雲に覆われて、見えなくなった、というわけです。義の太陽であるキリストが、雲に覆われて見えない、というのは、ちょっとさびしい気持ちもしますが、雲に覆われるというのは、大変意味のある表現です。

聖書で、雲というのは、どんな意味があるのか、皆さんはお判りでしょう。神様の臨在、神様がそこにおられることを表す象徴です。

モーセたちが、エジプトを出て、荒野を行く時、昼は雲の柱、夜は火の柱がイスラエルの人々を、エジプト軍から守りましたし、モーセがシナイ山で十戒を授かった時、山は雲に覆われていました。
また、ダビデ王の子であるソロモンが神殿を作った時には、

列王記上『8:10 祭司たちが聖所から出ると、雲が主の神殿に満ちた。 8:11 その雲のために祭司たちは奉仕を続けることができなかった。主の栄光が主の神殿に満ちたからである。』

このような雲が出てくる現象は、私たちがよく知っている、主イエスの変容の時にも出てきます。

ルカの福音書からですが、『9:33 その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。 9:34 ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。 9:35 すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。』

ある牧師さんの説教を聞いた時に教えられたのですが、高い山の上で、イエス様の衣が白く輝いたことを私たちは「主イエスの変容」と言っているけど、本当は、人間となり、貧しい大工の息子となったことが変容であって、栄光に輝くイエス様こそが、本来の姿ではないか。

だから、復活した後、イエス様が雲に包まれて天に昇られたのは、イエス様が、私たちの救いのためのみわざをすべて終え、もとおられた栄光に戻って行かれたことを示しているんだ、と言うのです。

昇天日の特祷の中に、「わたしたちは独りのみ子イエス・キリストが天に昇られたことを信じます。どうかわたしたちも心と思いを天に昇らせ、絶えず主と共におらせてください」と祈り、昇天後主日の特祷では「救い主キリストが先立って行かれたところに昇らせてください。」という言葉が出てきます。

「天に昇る」、というのは、なかなか想像できませんが、「険しい山に登る」というのはイメージがわくのではないでしょうか？私は、登山は趣味ではありませんが、人々が高い山に登っているのをテレビで観ていると、険しいところには、ロープとか鎖がつけてあって、それを頼りに登っているのを見ました。このようなロープや鎖は、最初からあったわけではないでしょう。最初に登った人は、そんなものがないところを、苦労しながら登って、後の人のために、ロープや鎖を作ったのです。そのおかげで、後に続く人々は、最初の人より簡単に山に登れるようになりました。

イエス様は、人間がエデンの園から追放されて以来、人間の側から神様の方へ帰ってゆく道が閉ざされていたのを、帰れるように、イエス様が先駆けとなって、私たちのために道を備えてくださったのです。それが、私たちの救いのためのみわざをすべて終えた、ということで、今栄光の雲に覆われて、神様の所に帰って行かれている。これが昇天ということを私たちが祝う理由です。

しかし、天に昇られた、ということだけでは、イエス様の昇天を十分には伝えていないように思います。マルコによる福音書１６章１９節には、このような言葉が出てきます。

『16:19 主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。』

これは私たちが、ニケヤ信経や使徒信経でよく口にすることです。でも、「神の右の座」とはどんなものでしょうか？「右とは何か」が問題になりますが、「彼は私の右腕だ」という表現をするなら、自分にとっての力強い味方、という意味でしょう。また、「右に出る者はいない」という言い方は、「自分に勝る者がいない」という意味ですから、右というのは、自分をしのぐ者ということになります。

しかし、聖書で「神の右の座」という言い方は、エルサレムの神殿と宮殿の関係なんです。神殿には神様がいて、宮殿には王様が住んでいます。昔、ダビデがエルサレムに都を築いた時、シオンの山の一番北側の高いところに神殿を建て、その南側に宮殿を建てるつもりだったのでしょう。

口語の詩編４８編『48:1 主は大いなる神であって、われらの神の都、その聖なる山で、大いにほめたたえらるべき方である。 48:2 シオンの山は北の端が高くて、うるわしく、全地の喜びであり、大いなる王の都である。』

その麗しいところに、東向きに神殿が建ち、その南側に王様の宮殿があったのです。ですから、神様が東に向かって座っていたら、その右の座に王様がいる、ということです。

それで、「神の右の座」とは、神様からのすべての権限を託された者が座るところで、世界を支配する王座、また、すべての人をさばく審判の座です。ソロモンが裁判をしていたことなど思い出します。そして、イエス様も世の終わりに、そこから裁きをおこなわる、ということでしょう。

しかし、私たちの罪を負って、十字架に架けられたイエス様は、もはや私たちをさばくようなことはなさらず、神様と私たちとの間をとりなしてくださる大祭司だ。私たちに、豊かに恵みを与える座におられるんだ、ということを、ヘブライ人への手紙の著者は語っています。それによって、神様が私たちにとって身近な方になるようにしてくださった、とヘブライ人への手紙を書いた人は考えていました。

ヘブライ人への手紙４章
『4:14 さて、わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかり保とうではありませんか。 4:15 この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。 4:16 だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。』

イエス様は、弟子たちを離れて、遠いところへ行かれた、ということではなく、私たちが神様のもとへ帰れる道をつけて、天国を、そして神様を近づけてくださったのです。そのことのために、人間に変容して、貧しい大工として、この世に来られ、十字架にかかってとりなしの業を行なわれました。それがすべて完了して、元の所に戻られたのが、昇天ですから、いつも私たちのことを心にかけて、時宜にかなった助けを与えてくださる。イエス様は、私たちを神様のもとへ行けるように道を備えて、そして、私たちをさばくのではなく、神様と私たちの間をとりなして、恵みの座にいつもいてくださる。それが、イエス様の昇天を私たちが祝う理由です。

イエス様の昇天という時にあたり、わたしたちを神様に近づけ、恵みを与えようとしておられるイエス様に感謝したいと思います。